

第十二回 小中学生「ふるさとの詩」 入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞	宮澤章二とぼく —三月十一日—	福島 尊翔	手子林小学校	六年	1
宮澤章二賞	家の前の神社	木村 光	手子林小学校	五年	2
優秀賞	まんまるなおなか	青木 玲也	新郷第二小学校	三年	3
	ごまをすって	久保木 啓介	新郷第一小学校	四年	4
	かえる	平野 遥基	三田ヶ谷小学校	一年	5
奨励賞	あつい夏	新井 勇真	新郷第二小学校	二年	6
	てとて	櫻井 捷人	手子林小学校	一年	7
	くし	渋澤 脩人	川俣小学校	五年	8
	ぼくの庭で	萩原 一帆	新郷第二小学校	六年	9
	通学路の景色	藤井 萌恵	須影小学校	六年	10

その他の良い作品

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 ぼくは中学生

荒川 大輝

西中学校

一年

12

宮澤章二賞 感謝の心

清水 健太

南中学校

三年

13

優秀賞 「思い出」

熊倉 七夏

東中学校

三年

14

金木犀―金木犀は知っている―

関根 多香美

東中学校

三年

15

利根川

室屋 光希

西中学校

三年

16

奨励賞 故郷の空を見上げれば

神谷 寧々佳

南中学校

一年

17

うちのびわ

五月女 佳奈

東中学校

二年

18

秋の光を感じて

鈴木 梨花

東中学校

二年

19

言葉の中で生きている

高田 華佳

西中学校

二年

20

帰り道

宮田 綾乃

西中学校

二年

21

その他の良い作品

22

◎小学生の部

太田玉茗賞

宮澤章二とぼく ―三月十一日―

手子林小学校 六年

福島 尊翔

初めて知ったのは

総合学習での羽生市偉人グループ発表会

詩人・宮澤章二が亡くなった日

平成十七年三月十一日

それは、ぼくが生まれた日と同じだった

あまりのぐう然におどろいた

不思議な出会い

今でもはつきり覚えている

五年前の三月十一日・六才の誕生日

「たけちゃん!!地震!!」お母さんが叫んだ

はげしくゆれる家具や家

すぐに停電した

ぼくの家屋根もこわれた

とても怖かった

翌日、テレビで見た東北地方の被害

津波の恐怖、信じられない光景に目を疑った

東日本大震災直後、

CMでくり返し流れた宮澤章二の詩

大好きな優しいフレーズ

「思いは見えないけれど

思いやりはだれにでも見える」

ぼくも自然に行動できる人になりたい

あれから五年

毎年三月十一日を迎える度に

今、生きていること

そして、命の大切さを改めて感じる

今また、熊本では地震で大きな被害

どんなに怖かっただろう

ぼくもできることから始めたい

優しい思いやりの小さな一歩

羽生から広がる思いやりの輪

日本全国につながる優しい輪

心温まる思いやりの輪で

世界が平和になることがぼくの願い

宮澤章二賞

家の前の神社

手子林小学校 五年

木村 光

「チロチロ。」
「スーッ。」

朝、窓を開けると
気持ちのいい風と、鳥のさえずり。
ぼくの家の前は神社だ。

五月。
けやきのあざやかな緑が広がっている。
まるで、絵にかいたようだ。
その木のでっぺんに
ツリーハウスを作ってみたい。
ぼくの夢。

秋になった。
いちようの葉が黄色に変身する。
黄色の葉が夕日を浴びて
キラキラ光っている。
まるで、夜空にかがやく星のようだ。

地面には一面の黄色のじゅうたん。
本当に家の中にあつたらいいな。

冬になった。
葉は散り、幹だけになる。
木のすき間から空が見える。
なんだかわからないが
さびしい気持ちになる。

春になった。
鳥のさえずりとともに
桜の花が咲き始める。
満開になった桜を見ると
胸がわくわくしてくる。

ぼくの家の前神社は、
夢を与えてくれる場所。
心をいやしてくれる場所。
そして、ぼくにとって
ずっと大好きな場所。

優秀賞

まんまるなおなか

新郷第二小学校 三年

青木 玲也

お母さんのおなかがまんまるだ
それは、赤ちゃんがいるからだ
ちよつとずつ大きく
ふくらんでいったおなか
それは、赤ちゃんがおなかの中で
ちよつとずつせい長しているからだ
赤ちゃんは、おなかの中で
何をしているんだらう
明るいのかな、くらいのかな
おながすいたらどうするのかな
ぼくの声は、聞こえているのかな
ぼくもおなかの中にいたことあるけど
ぜんぜんおぼえていないな
お母さんが休んでいると
大きなおなかが「ポコ、ポコ」うごいた
そつと手をあててみる
「うごかなくなっちゃった。」
「きつとはずかしがりやさんなんだね。」

お母さんがそういった
「なんだ、つまらないな
でももう少ししたらあえるね
うまれてきたらいっぱいあそんで
あげるからね
げんきにうまれてきてね
おなかの中でなにをしていたか
おしえてね。」
ぼくは、はずかしがりやの赤ちゃんに
そういった。

ごまをすって

新郷第一小学校 四年

久保木 啓介

パチパチパチ
台所から音が聞こえてきた
「ごまこすり手伝ってー」
ばあばの声だ
ごまばちをおさえてもらって
ゴリゴリゴリゴリ
ごまをする

小さいころはうまくすれなくて
すりばちをおさえるだけだった
でも今は
じょうすにごまをすれるよ

こおばしいにおい
おさとうたつぷり
しょうゆも入れて
後は味見だよ
あまじよっぱくて
ついつい何度もなめちゃうんだ
ほうれん草を入れたら
ごまあえの出来上がり

いんげんのごまあえもおいしいね

お母さんの実家へ行ったら

ばあちゃんからごますりたのまれた

ゴリゴリゴリゴリ

ごまをすったらおさとうを入れて

「えっ、ねぎを入れるの？」

「青じそにみそ？」

ぼくの頭の中は「？」だらけ

最後にお水と氷？

「ばあちゃん、ぼくは何を作っているの？」

できあがったのは

冷じる

ばあちゃんの手打ちうどんを食べる

スープだったんだ

「へー、冷え冷えでおいしいね」

かえる

三田ケ谷小学校 一年

平野 遥基

げんかんをあけたら
ぼくのいえに
ピヨーンとかえるがはいってきた
ママが「きやーっ」ってさげんだ
ぼくはかえるをつかまえた
ぼくのてのひらから
ピヨンとはねて
アスレチックみたいに
ぼくのゆびをわたっていく
おちそうになつて
ぼくが「あっ」っていったら
ピヨーンとゆびにしがみついた
おちなかった
またのぼってきた
ゆびをわたって
おおきくジャンプした
「すごいっ」
うごきがおもしろくて
ぼくはずっとみていたくなつた
よるになつて
ケロケロケロケロ

たくさんのかえるがいない
さっきのかえるもいないか
ぼくはふとんのなか
かえるはいつねるのかな
たんぽのおふろにはいつて
くさのふとんでねるのかな
ケロケロケロケロ
かえるはずつとない
こえをきいていたら
ぼくはとつてもねむくなつた
おやすみかえるさん
あしたもまた
ぼくのいえにあそびにきてね

奨励賞

あついで夏

新郷第二小学校 二年

新井 勇真

はじまった
あついで夏のはじまりだ
プールに入っても
水つてぼうであそんでも
かきごおりをたべても
あついで
でも たのしいこともある
おまつりや
はなび大会
カブト虫やザリガニとりと
おとまり
スイカわりと
けん道の大会
やりたいことがいっぱいだ
せんぷうきがつぎの月のカレンダーをめくつ
てくれた
九月はもうすぐだ
お母さんが言った

「九月もあついでだよ。」
つてさ
まだまだ
夏はつづきそうだ
ぼくは
コーラをいつきにのんだ
かかってこい
あついで夏

てとて

手子林小学校 一年

櫻井 捷人

ぼくのて

ぐるぐるとえをかく

ばらばらとほんをひらく

がばつとらんどせるをあける

ちよきちよきとおりがみをきる

ぎよつとえさをつかむ

おかあさんのて

かちやかちやとしよつきをあらう

ざざつとくさをぬく

があがあとそうじきをかける

ぱたぱたとせんたくものをほす

そつとぼくのてをにぎる

くし

川俣小学校 五年

渋澤 脩人

ぼくもまだまだ使えらと思う。
ぼくが直して、いつまでも使っていく。
ひいひいおばあちゃんの銀のくし。
今は、ぼくの銀のくし。

ぼくのどこや道具
銀のくし
はさみ
イス
首にまくぬの

「いたっ。」
銀色のくしにぼくのかみのけがひっかかった
よく見ると、くしの歯が曲がってる
このくしは、
ひいひいおばあちゃん、
ぼくのお父さん、
お兄ちゃん、そしてぼく。
何十年と使ってきたから
つかれちゃったのかな。

でも、新しいくしをほしいと思った事がない。
お母さんも
「この銀のくしが使いやすからすてられな
い。」
と言っていた。

ぼくの庭で

新郷第二小学校 六年

萩原 一帆

一ぴきのせみがからをぬいだ。

きらきらと光る目

とうめいな羽

まるでうす緑色のエメラルドのよう

そんなせみをぼくは見つけた

せみはからにつかまっている

明日になり、大空をとぶのが

楽しみだというように

だからずっと

ずっとずっと

かがやくせみを見ていたい

次の日ぼくが起きると

あの中からだけが残されていた。

ぼくはぬけがらといっしょに

とり残された気持ちになった。

今、あのせみは

残された時間をせいっぱいとんでいるだ
ろう

通学路の景色

須影小学校 六年

藤井 萌恵

「行ってきます！」
いつものように通る通学路
低学年の頃は 歩いてても歩いても
なかなか学校にはたどり着かなかつたけど
今年最後の六年目
長い道のりならではの発見を
楽しめるまでになった

いつもの人や車と ほぼ同じ所ですれちがう
会わない時は 今日休みかな？と
一人で考えてみたりする
お地蔵様には 今日のテストの成功を
密かに願う
お菓子製造工場が近づくと
甘いにおいに わくわくする
隣のお店の中から いつもの店員さんが
笑顔で手をふってくれる
おじぎをして 手をふり返した後は
家までもう少し頑張ろうと 気合いが入る
かくれんぼのように 色々な楽しみが
次々と見つかる

葛西用水路沿いの桜が咲きほこり
水と共に流れる花びらを目で追う 春
田んぼに植えられたあざやかな緑と
しゃ断機を陽炎越しに見る 夏
風で音を立てながらゆれる稲穂が
広い海の波のように見える 秋
まだ誰も踏んでいない霜柱を見つけて
ザクザク踏みながら歩く 冬
まだ保育園児の弟にも この通学路が
私と同じように見えるといいな

来年からはもう歩くことのない通学路
いつまでも変わらない景色を願って・・・

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
思い出の一枚	新郷第一小学校 四年	小川 恭佳
ブーゲンビリア	新郷第二小学校 六年	川 篤 美穂
しょうぎ	新郷第二小学校 一年	小森 陸生
ゆうがたのおと	羽生南小学校 一年	関根 伶
わくわくドキドキはにゅうとしよかん	井泉小学校 一年	はすみ ひなの
命の重さ	手子林小学校 六年	蓮見 倭士
まほうの言葉	手子林小学校 四年	濱野 啓介
ホタルの光	手子林小学校 三年	吉田 直哉

◎中学生の部

太田玉茗賞

ぼくは中学生

西中学校 一年

荒川 大輝

祖父母が買ってくれた銀色の自転車。
教科書とノートで重くなったかばんを前かご
に乗せる。
ゆっくりとペダルをこぎ出す。
6年間歩きなれた道を今までとは違うスピー
ドで進む。
通いなれた新郷第一小学校を過ぎる。
スピードをぐんぐん上げる。
新しい道だ。
スピードをぐんぐん上げる。
今日から毎日この道をぼくの銀色の自転車で

走る。
ぼくは中学生だ。

少しどきどきする。

テスト用紙が配られる。

前の人から受け取り、後ろの人に渡す。

「それでは始めてください」

先生の言葉でテストが始まる。

教室はしーんと静かだ。

カリカリ カリカリ カリカリ

シャーペンで答えを書く音だけが聞こえる。

カリカリ カリカリ カリカリ

ふと窓の外を見る。

新しい景色が見える。

そうだ。

ぼくは中学生になった。

宮澤章二賞

感謝の心

南中学校 三年

清水 健太

負けられない試合だった
休日にもかかわらず
稽古をつけてくださった先生方
苦しい練習を一緒にがんばった仲間
弁当を作ってくれた母
車出しをしてくれた父
僕を支えてくれた
いろいろな人の思いを背負って
臨んだ地区予選大会の団体戦
結果は四位だった
あと一本取れば
県大会に行けたのに
悔しくて食事ものを通らなかった
その後 僕は考えた
なぜ負けたのか
弱点はどこだったのか

そして気づくことができた
試合で戦ってくれた相手を
大切に思うことと
相手に感謝することが
心と技を磨くためには
とても重要なのだと
やっと終わったという
ほっとした気持ちと
もう少しやっておけばよかったという
少しの後悔
さみしいような
悲しいような
微妙な気持ち
このような僕の心の成長は
剣道をしている人たちの
出会いがあったからだ
「試合では負けたが、剣道では負けてい
なかつたぞ。」
顧問の先生の言葉が胸に響いた
これからも
感謝の心を忘れずに
稽古に励んでいきたい

優秀賞

「思い出」

東中学校 三年

熊倉 七夏

セミが鳴いている
あの頃も鳴いていた、うるさいくらいに

今日は蓮台寺のみこしかつぎだ
地区の友達が集ってみんなワイワイみこし
をかつぐ伝統行事

―じいちゃん、今日はじいちゃんもかつぐん
だね―

じいちゃんのはっぴを着ている
―楽しみだな―

この伝統行事にははじめの言葉がある
日が照りつける中、じいちゃんはじつと立ち
ながら話を聞いている

おじさんの話は長くて退屈だ

セミの鳴き声だけが大きくなっていく
暑さを極立たせるようにセミは鳴いている

あのとき、祖父と目が合った
今でもしつかり覚えている

祖父は私に優しい笑顔を見せた

仏壇にある祖父の遺影も優しさであふれ
ている

セミは変わらず、夏を謳歌するように鳴
いている

残暑の中、葬式は行われた

私には数え切れないくらいの人たちが集
まってじいちゃんのを悲しんでいる

お骨は蓮台寺のお墓に入れられた

―ここなら、じいちゃんのお母さんやお
父さんもいるし、悲しくないでしょ―

線香をたいて手を合わせる

セミの鳴き声だけが聞こえる

命の期限が近づいたセミの鳴き声

私と祖父の夏の思い出、忘れることはない

セミが鳴けば思い出す

きつとこれからも、大人になっても

金木犀―金木犀は知っている―

東中学校 三年

関根 多香美

門扉の横、居間の前。
金木犀の木が一本。

私が二才の時に家を建てた父と母が、家のシンボルツリーとして植えた木。

金木犀は知っている。
私があんぱんマンのビデオが好きだったこと。

庭に花を植えたりジャガイモ掘りをしたこと。
帽子をかぶり黄色いバックを横がけにして幼稚園バスをワクワクしながら待ったこと。
赤いランドセルを背おい楽しく小学校に通ったこと。
新しい制服を着て新しい自転車に乗り希望に満ちて中学生生活をスタートさせたこと。
金木犀は知っている。

いい事ばかりでなく悲しいことや辛かったこと。

母にしかられ号泣する姿。

兄とケンカし意地を張る姿。

陸上競技会で優勝できず悔しがる姿。

剣道の試合に勝てず素振りをする姿。

十五年の月日の中に起きた出来事。

私の記憶に残ることもそうでないことも、

金木犀は知っている。

これから先、何年私は金木犀の新緑に青々とする姿やオレンジの小花をたくさん咲かせ匂い立つ盛りの姿を見ることができるよう。

その間に私にどんな変化が訪れるのだろうか。

私と共に大きく育った金木犀の木。

羽生の木、家のシンボルの木、私のふる

里の木。

いつかどこかで金木犀の木を見た時、その香りをかいだ時、私は思い出と共にふる里を思うのだろう。

金木犀は知っている。

利根川

西中学校 三年

室屋 光希

青い空と白い雲

一面に広がる緑の植物たち

そのおくに静かに流れている

利根川

キラギラと太陽の光をあびて

流れてゆく ゆっくり 静かに

保育園のころ

小さい体で

トコトコトコトコ歩いてゆく

必死で利根川の土手を上がると

大きく立派に流れる利根川が迎えてくれた

小学生のころ

毎年春の利根川ハイキング

六年生から一年生で一緒になり

利根川を見ていた

悲しいとき

野球の試合に負けたとき

けんかしたとき

色々なときにここへ来る

土手に寝そべり 空を見て 深呼吸をする

利根川から見える景色を見て

悲しみ 苦しみ 悩みなんて

そんなものふつとんでしまう

悪いものは忘れさせてくれて

良いものを思い出させてくれる

いつかふるさとである羽生を離れても

いつかまたこの羽生に戻ってくる

また土手に寝そべり 深呼吸をしながら

あの大きくて立派な利根川を見るために

これからも僕に元気を下さい

そうしたら明日からまた頑張れる

これからも大好きだよ

奨励賞

故郷の空を見上げれば

南中学校 一年

神谷 寧々佳

私はつらい事や苦しい事があつた時
頭の上に広がる大きな大きな空を見上げる
大きくてどこまでも広がる「故郷の空」を
つらい時 下ばかり向くと「地面」しか
見えない
それ以上どこへも進めなくなるような
つらい気持ちになつていく
確かにつらい時はただだつて下を向きたくな
るかもしれない
それでも私は空を見上げる
空を見上げていると
気持ちやすーつと楽になるんだ
空を見上げていると
あと少し もう少し もっと頑張ろうって
気持ちになつてくる
空つて不思議 とつても不思議

毎日毎日違った色
雲と太陽の光が重なつて
雲のふちをなぞつたようにオレンジ色の
光が雲をふちどつている
これは夕焼けの空
すごくきれいで私のお気に入り
この夕焼け空を目に焼きつけて
次の日も私は学校へ行く
朝のすみきつた空も私は好き
雲が一つもないすんだ空
心がどんどんきれいになつていくような
感じがする
空は私の気持ちを励ましてくれる
大切な存在なんだ
空を見ていると
自然がとても感じられてくるんだ
毎日毎日
つらい事 苦しい事がある
それでも私は空を見上げて
歩いていく
大きくてどこまでも広がる
「故郷の空」を

うちのびわ

東中学校 二年

五月女 佳奈

いつからだろう
私が小さいときからある
あの木
大きく立派にたっている
あの、びわの木

毎年たぐさんの実をつけて
たぐさんの「おいしい」を届けてくれる
小さかったお姉ちゃんの
小さかった私の
まだ小さい妹のおなかを
いっぱいにしてくれるあの実

時期じゃないときでも
家のかどからずっと
見守ってくれてた
あつたかくて大好きだった
だけど大きくなりすぎて

道路に飛び出して
切られることになった
あとに残った切り株は
なにか悲しげだ

うちでびわがとれなくなつて
母がびわを買ってきた
みんなでそれを食べたけど
うちのびわの方がおいしい
だからみんなでその種を
切り株の近くに植えたんだ

今は切り株の近くに小さな木がある
小さな小さなびわの木
いつか立派に大きくなつて
みんなのおなかを
いっぱいにしてくれるかな

秋の光を感じて

東中学校 二年

鈴木 梨花

朝日が顔を出し、
薄暗い辺りを少しづつ光で包んでいく

明るさが増して来る頃に
涼しいそよ風が窓から入ってくる

外へ出てみれば少し肌寒い風も
朝日の暖かさで包まれていく

新しい一日の始まりを
鳥達がさえざつてくれる

暑さのひかえめな昼間には
虫達もひかえめに鳴く

木々達は葉を紅色に染めていき
風に乗って一つ、また一つと散っていく

秋を感じさせるとそよ風に
少しだけさびしさが感じられた

先程まで真上にあつた太陽は
もうすっかり焼けたオレンジ色をした
夕日になっていた

少し雲がかかりながらも
辺りを濃く美しく照らし出していた

まるでグラデーシヨンのような
美しき夕日に時を忘れていく

この美しき一日の風景は
自然あふれる羽生だからこそその景色だ

言葉の中で生きている

西中学校 二年

高田 華佳

朝のあいさつ

「おはよう」と言えば

「おはよう」と返ってくる

時にはケンカをするときもある

そうしたら

「ごめんね」と言っ

「いいよ」と返ってくる

謝った方は

「ありがとう」と言っ

「こちらこそ」と返ってくる

またいつものように笑顔が戻る

帰り道

「じゃあね」と言ったら

「また明日」と返ってくる

そんな言葉の中で

私たちが生きている

帰り道

西中学校 二年

宮田 綾乃

学校からの帰り道
自転車をこぐ足と
ハンドルをにぎる手は
日差しと汗でとけかかっている
脳みそは
半分とけていて
家に帰ることしか考えていない手と足を
動けと指令するのにいっぱいいっぱいだ

ああ
今日も疲れたと
自転車を下りて 空を仰ぐ
そよ風が顔にあたって とっても気持ち
良い

その風は
あたり一面の稲に声をかけて
寝坊助を起こしている
何人かの稲は

私に「お疲れ様」と
声をかけてくれた
また明日も がんばろうって思える
足をまたペダルにかけ
坂道を登る
もうひとふんばり
クーラーのきいている部屋と
手つかずの 大量の宿題が
近づいてくる

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
「いつかわかるのかな」	南中学校 三年	柿沼 晴奈
大好きなうどん	西中学校 一年	久保木 さくら
あたりまえの毎日	東中学校 三年	小久保 未紅
故郷と生きる	東中学校 三年	小竹 夏鈴
僕の心の灯台	東中学校 二年	五月女 友弥
緑の海をかけて行く	西中学校 一年	下西 秀和
「夏の戦い」	東中学校 一年	下山 美咲
小さな夏の神様	西中学校 三年	須永 陸杜
ふるさとと共に	東中学校 三年	福島 ひなき

第十二回 小中学生「ふるさとの詩」

募集要項

利根川の流に生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

このお二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

●募集作品

- ・ 「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・ 自作で未発表の作品（過去に書いた作品でも構いません。)
- ・ 応募作品数は一人1篇

●応募方法

- ・ 400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・ 各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

●応募資格

- ・ 市内の小学生・中学生

●応募締切

- ・ 平成28年9月9日（金）

●発表

- ・ 平成28年11月中旬に通知

●賞

- ・ 小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞1篇、宮澤章二賞1篇、優秀賞3篇、奨励賞5篇
- ・ 賞状と盾を贈呈します。

●その他

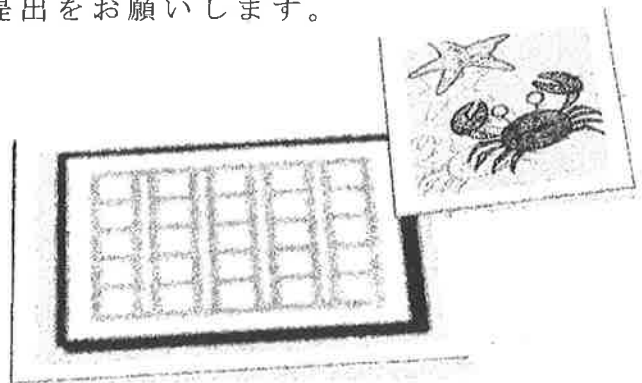
- ・ 応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却いたしません。
- ・ 入賞者の作品・氏名・学校名・学年につきましては、広報に掲載するほか、報道機関等に公表いたします。

●主催 羽生市

●応募・問い合わせ先

羽生市役所 秘書広報課

〒348-8601 羽生市東6-15 Tel.561-1121（内線204）



●第十二回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	898篇
中学生の部	962篇
応募総数	1,860篇

●選考委員（五十音順）

生 方 祐 子
塩 田 禎 子
根 岸 光 子
萩 原 澄 江
水 野 栄 子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 平成29年1月30日